井上楊南（いのうえようなん）　魚文壺（ぎょもんつぼ）

高さ21.3cm　口径６cm

　常滑陶器学校の教員であった井上楊南の昭和14年の作品です。丸みのあるフォルムに分厚い口縁を持つ壺には、彫刻によってトビウオや海草、カニなどが生き生きと表現され、海中の世界が広がっています。成形した壺に彫りを入れることで躍動感（やくどうかん）のある作品になっています。

現代の壺

大迫みきお　窯変大壺（ようへんおおつぼ）

高さ41.2cm　口径16.2cm

　平成時代の大迫みきおの作品です。この壺は、赤茶色の土で成型され、口縁と頸が一体となっています。さらに薪（まき）の灰が自然釉となって作品にかかり、形状に沿って流れ落ちる様は自然が生み出した景色と言えます。大迫みきおは、陶芸研究所の技術吏員（ぎじゅつりいん）でした。壺をつくるのが得意で「壺の大迫」と呼ばれていました。

ラファエル・ナバス　白化粧幾何学文壺（しろげしょうきかがくもんつぼ）

高さ61.4cm　口径15.4cm

　ラファエル・ナバスは、やきものの土や金属をはじめとする様々な素材を使うスペイン出身のクリエイターです。本作は、白化粧が施され、その上に黄色や緑、赤などの色を用いて幾何学模様が描かれています。白化粧においては、ムラがあえてつくられ、表面に凹凸（おうとつ）が生み出されています。一部、白化粧が剥落していますが、剥落（はくらく）した下地にも絵付けが施（ほどこ）されています。本作は、作者が常滑にきた頃の作品であり、やきものの常識（じょうしき）にとらわれない豊かな発想によってつくられているため、みる人を飽きさせません。

とこなめ陶の森 陶芸研究所 企画展

常滑の壺（つぼ）展

松本重信作「彩色龍巻花瓶一双」

とこなめ陶の森 陶芸研究所

展示概要

「壺」は古くから生産されているやきものの一つです。壺は、広辞苑に「口がすぼまり、胴の丸く膨らんだ形の容器」と記載されています。壺は形状によって、さらに細かく分類され、それぞれに名称があります。

やきもののまち常滑では、平安時代末期から今日に至るまでの長い歴史の中で、様々な壺がつくられてきました。その中には油やお酒などをいれる容器としての壺や、茶の湯などで使われる観賞用の美術品としての壺もあります。

本企画展では、平安時代から現代に至るまで常滑でつくられてきた壺を展示し、それぞれの魅力を紹介します。

（とこなめ陶の森　石津琳那）

中世の壺

自然釉三耳壷

高さ39.5cm　口径21cm

緑色の自然釉が四本の線となって流れ落ちる様と常滑らしい赤茶色の胎土が美しい作品です。壺の装飾の一つに耳と呼ばれるものがあります。この耳は、蓋などを固定するひもを通す役割を持っていましたが、本作は穴がとじられており、装飾化しています。常滑では耳付き壺はあまりつくられておらず、とても珍しい作品です。

三筋壺

高さ26.5cm　口径9.5cm

平安時代末期の作品で、焼成時の温度が非常に高く、表面はしっかりと焼けたことで黒くなっています。しかし、この黒い土の色味と緑がかった自然釉の流れる様子が美しいコントラストになっています。表面は撫でて滑らかにされ、ヘラ描きで壺の表面を一周する沈線が刻まれています。この沈線が３本あるので、この壺は三筋壺と呼ばれています。

近世の壺

らっきょう壺

高さ35cm　口径11.2cm

江戸時代末期から明治時代ごろにつくられた壺です。赤茶色の土に自然釉がかかり、マットな表面になっています。焼成が非常に良好で、焼き締まった土からは重厚な雰囲気を感じます。丸みのある口縁部となだらかに膨らむ胴部、すぼまった底部までの形状がらっきょうを連想させることからこの名がつけられています。

上村白鷗　不識水指

高さ14.8cm　口径15cm

江戸時代後期の上村白鷗の作品です。釉薬が全体にかけられ、黒い土の色味を引き立てています。本作は茶道具ですが、鎌倉時代につくられていた広口壺がルーツとなっています。茶人の千利休も常滑焼の広口壺を茶道具の水指として愛用していたことが伝えられています。

近代の壺

松本重信　彩色龍巻花瓶一双

高さ55cm　口径14cm

朱泥の土でつくられた花瓶で、常滑の陶芸家、松本重信の作品です。粘土を貼り付けることにより浮き上がる雲と白龍の立体的な装飾によって迫力のある姿を見せています。口縁部には、銀彩の雷文とそれを挟むように金のラインが描かれ、外反する頸部には、鮮やかな菊や牡丹唐草の立体的な加飾があります。底部付近には、波千鳥が描かれ、細部にまでこだわった作品になっています。常滑では朱泥焼龍巻が多くつくられていましたが、本作のように彫刻した後に彩色が施されているものは大変珍しいものです。また、当時の常滑の高い技術を知ることのできる貴重な作品です。